

## 折口信夫の歌舞伎絵葉書コレクション

國學院大學研究開発推進機構学術資料館 ポスドク研究員

齋藤 しおり

### ■折口信夫略歴（明治 20 年～昭和 28 年）

大阪府西成郡木津村（現在の大阪市浪速区敷津西町）に生まれ、幼年期から詩歌・歌舞伎などに親しむ。大阪府立第五中学校（現在の天王寺高校）で三矢重松、武田祐吉らと出会う。國學院大學進学後、詩歌に加えて国語学にも興味を持ち、卒業論文は師と仰ぐ三矢重松に「言語情調論」を提出。卒業後は大阪府立今宮中学の嘱託教員を経て、國學院大學講師から教授に就任。後に慶應義塾大学文学部教授にも就任する。国文学の民俗学的研究を樹立し、『古代研究』3 巻が代表的な著作。三矢亡き後は「源氏物語全講会」を継承した。釈迦空の名で、短歌・詩・小説などの創作を行い、作品には歌集『海やまのあひだ』『春のことぶれ』、詩集『古代感愛集』、小説『死者の書』などがある。

### ■折口博士記念古代研究所■

折口博士記念古代研究所は、昭和 28 年 9 月 3 日の折口死去後、昭和 29 年 2 月 11 日に折口博士記念会が組織され、これを基盤にして昭和 41 年 4 月に文学部の付属研究所として発足した。折口博士記念会は、折口没後に武田祐吉博士が発起人となって組織された。折口博士記念会ならびに折口博士記念古代研究所で『折口信夫全集』全 31 巻の編集、さらに『折口信夫全集 ノート編』全 18 巻・別巻、『折口信夫全集ノート編 追補』全 5 巻の編集で、折口の学問・創作などの集大成を行い、折口の業績を継承してきた。現在、研究所には、折口の蔵書であった折口記念文庫、折口自身による諸研究資料、全集編纂の過程で収集された資料など、約 3 万点が収蔵され、研究活動が行われている。

## 0. 伝統文化リサーチセンター等における研究活動

### i オープン・リサーチ・センター

#### ●設立の趣旨

伝統文化リサーチセンターは、國學院大學の建学の精神を具現化し、それを将来にわたって強固なものとするための構想である「國學院大學 21 世紀研究教育計画」の具体的事業「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」を推進するために、平成 19（2007）年、研究開発推進機構に設立。

「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」は、平成 19 年度の文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業に選定された。事業期間は同年度から平成 23（2011）年度まで。

#### ●目的

「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」は、本学の研究・教育能力と成果公開機能の強化・向上を目指し、伝統文化リサーチセンターを主体に、本学の多様な学術資産を研究対象とする研究の推進と、若手及び外部研究者を広く受け入れ、組織化した研究体制の構築をします。そして、成果の展示やインターネットでの公開等を進めることにより、生活の中で作り上げられた「モノ」と、その背景にある「心」の関係を明らかにし、そこから抽出される伝統文化が育んだ知恵と実践の社会的意義を究明・発信することを目的とします。

伝統文化リサーチセンターでは、

1. 「祭祀遺跡に見るモノと心」グループ
2. 「神社祭礼に見るモノと心」グループ
3. 「國學院の学術資産に見るモノと心」グループ

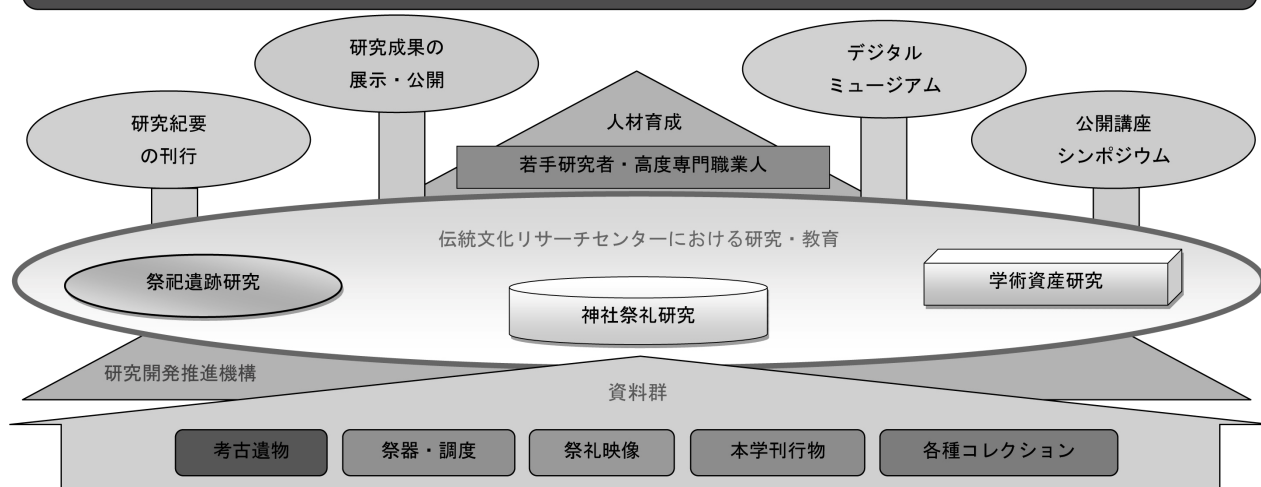
以上 3 つのグループを編成して事業を推進しております。

#### ●3. 「國學院の学術資産に見るモノと心」グループ概要

このグループでは、本学及びその設立母体である皇典講究所が出版した刊行物や、本学所蔵資料に基づき、本学における伝統文化研究発信の実態と、そこで重要な意味を持つ「国学」の学問的手法・特性により、近代以降の「モノ」と「心」に関する人文学の展開を明らかにします。

（國學院大學研究開発推進機構 HP より）

## 伝統文化の特質解明と成果公開による人材養成と社会貢献



### 《概念図》

(國學院大學研究開発推進機構 HP より)

## 1. 折口信夫と歌舞伎

### i 幼少期の生活環境

#### ・ 木津と言う場所

木津村は今、大阪市南区（現在更に浪速区）木津となった。所謂「木津や難波の橋の下」と謡れた、<sup>イタチ</sup>鼬川<sup>ミナト</sup>といふ境川一つを隔て、<sup>ワタナベ</sup>南区難波、即、元の難波村と続いてゐる。東は今宮、西は南町と言ふ、かの渡辺で通つた、えた村である。

「折口といふ名字」

#### ・ 育英高等学校時代

通学の道程一里。途中、千日前・道頓堀及び、所謂南地五花街を経る

「自撰年譜 一」

#### ・ 天王寺中学校時代

通学距離二十町余。道、江戸時代以来の貧窮街長町裏・家隆塚と伝へる夕陽个丘・勝曼院・巫女町を通る

「自撰年譜 一」

### ●祖母の義弟にあたる上野万治郎の存在

さて、信夫八歳の頃、上野家は笠屋町から六筋東へ寄つた、同じ南区の竹屋町へ移転することになる。この家がたまたま右団次宅に隣接していたのであるが、これが信夫の心を右団次へ結びつける動機になったと考えられるのである。(略) 学校の帰りによく万治郎宅に立ち寄つた信夫は、右団次の家の前を通ることにも言い知れぬ喜びを抱いたことであろう。中座の舞台で顔馴染みになっている座頭役者であり、当時大阪役者の最高位にあつた右団次なれば、なおさらであつたろう。美しく飾り立てた定紋入りの駕籠を、その玄関に横付けにし、威風あたりをはらうような姿で現れた右団次が、その背後からお内儀に切火を打ちかけられて送り出される楽屋入りの光景を、信夫は幾度となく憧憬と陶醉との入り混じった心で眺めたことであろう。

(略) なればこそ、月郊の右団次容貌論に対して平素の遠慮謙遜をかなぐり捨てて、その記憶力の確かさを表明しているのである。右団次の茶の作法をも目にとめていたであろうし、「右団次」は「右団治」と書くのが正しく、「次を用ゐない」と断定しているのも、右団次の自筆署名なり、玄関の表札なりの字を確認し

ていたからのことであろうし、身近に接しうる偉大なる優人について、知れる限りの知識を得ようと家族に求めたとも考えられる

中村浩「右団次の周辺」

## ii 歌舞伎の記憶

日清戦争当時、何を見て過したか、殆、払拭せられた碁盤の面のやうに記憶の痕もなくなつてゐる。ところが唯一つ、花道から走つて出た若い将校の身辺で、幾つかの煙硝火が発火する。(中略) 此が松崎大尉であつて、土地は牙山城外である。演ずる所の優人は、中村鴈治郎であつた。数へて見ると、此が私の八歳の時である。

「春永話」

源之助の朝日座でした中将姫の顔を私は見たのを憶えてゐる。(中略) この時、私は尋常三年の頃であつたが、「朝顔日記」の浜松非人小屋の段も見た。これは乳母の浅香が悪者と戦つて死ぬ場で、これを源之助がし、非人小屋の前で戦つてゐただけが記憶に残つてゐる。

「役者の一生」

幼い頃の記憶はあきれ程残つてゐなうものである。だがどう言ふ訣か、覚えてゐる一コマの映像がある。今思へば恐らく、まだ京都修行時代で、上京して東京座に居居つた時より前の延若であらう。その当時の延二郎が「中の芝居」の涼み芝居にかゝつた事がある。その時の一役「大黒屋惣六」が延二郎だつたが、宮城野も信夫も記憶から消えてしまつてゐる。

「実川延若讃」

此中の芝居通ひの間に、斎入になつて死んだ市川右団治(次を用ゐない)の芝居は、ほんとにいやと言ふ程見た。「兼る」と言つた芸風の人ではあつたが、芸の素質はさして広い人とは言へなかつた。「立役」はしても「実悪」を兼ることは絶対になかつた。「娘形」は近年になつて思ひ当つた事だが、今の中村雀右衛門さへ其型をうつして居る点が多い位だ。而も、「おやま」としては、其外には手は出さなかつた様だ。

「芝居の話」

### ●幼少期の歌舞伎体験について

10歳以前からの歌舞伎体験の記憶は、折口のなかでは、戦後の60歳を超えても鮮明に残されており、その歌舞伎愛好は、自身の学問や文学創作に底流してきたことは確かで、それは、たとえば「まれびと」論のなかの芸能発生論や芸能史などへの視点を遡通しているといえよう。

小川直之「折口信夫博士の歌舞伎絵葉書コレクションについて」

## iii 東隣の息子「猪之さん」のこと―

私の生れた大阪の家の東隣が鰻屋で、その長男が早く役者になつて三桝稲丸の弟子入りして、稲桝と言つてゐた。その人の弟といふのが兄貴に弁当を搬んでは、殆毎日芝居を見て来る。その子につれられて、私も小学校に通ふ頃から、芝居を楽屋から入つて見る事を覚えてゐた。

「実川延若讃」

家の東隣の鰻屋の兄むすこが、三桝稲丸と言ふ東京から来て居た役者の弟子となつた。其で、その弟と同年配だつた私は、よく日曜には、此役者の弁当を持つて行くため猪之さんと言ふ子にお供して〈中の芝居(中座)〉の楽屋を這入つた。(略) だから中の芝居の事なら、舞台から客席へ亘つて居る天井裏から、奈落の暗がりの事までも知つて居る。今でも耻しくなるのは、幕がしまると、猪之さんと私がばらぐと花道へ飛んで出て、今這入つたばかりの役者のまねをして、六法を踏んであるいたりした幻のちらつく時である。

「芝居の話」

でも、其芝居にも離れねばならぬ時が来た。稲丸が東京へ帰つて、稲升は、中村玉七の預り弟子として暫らく居る中に、三河屋の荒二郎について横浜へ行つて了うた為であつた。此が中学二三年の頃である。

#### iv 観客と評論家と

【明治】42年「封印切漫評」

【大正】7年「椀久」／8年「御国座へ」／9年「芝居に出た名残星月夜」／13年「芝居の話」／14年「歌舞伎興隆期を中心に見た世相」、「辻の立ち噺」／14～15年「江戸歌舞妓の外輪に沿うて」、「歌舞伎芝居の成立」

【昭和】2年「国文学の発生（第四稿）」／3年「ごろつきの話」／7年「実悪役者を望む」（大谷友右衛門）／11年「無頼の徒の芸術」／14年「歌舞伎とをどりと」／17年「役者の一生」（澤村源之助）／19年『日本芸能史六講』／20年「街衢の戦死者」（中村魁車）／21年「憂々たり 車上の優人」（市川右団次）、「芸の有為転変相」、「雑感」／22年「市村羽左衛門論」、「日本の女形」（中村梅玉）、「手習鑑評判記」、「合邦と新三」、「手習鑑雑感」、「玉手御前の恋」、「日本文学の発生 序説」、「見ものは合邦辻」／23年「夏芝居」、「正直正太夫に期待す」、「お岩と与茂七」／24年「実川延若讃」、「宗十郎を悼む」、「菊五郎の科学性」、「草草紙と講釈の世界」、「寄席の夕立」、「春永話」、「涼み芝居と怪談」、「芸能民習」／25年「日本芸能史序説」、「延若礼賛」／26年「花の前・花の後」、「自然女人とかぶき女と」（中村歌右衛門）、「由良助の成立」、「若手歌舞伎への期待」／27年「日本の芸道」、「舞ひと踊りと」

#### ●戸板康二の功績

本書の内容の大部分が戦争後に書かれてあると言ふ事は、直接にか間接にか戸板康二が先生に書かせてあると言ふ事になる。戦災によって不慮に倒れた中村魁車を悼む文章「街衢の戦死者」が当時戸板が編集長をしてゐた「日本演劇」に載ったのが、口火となつて、先生は其後、わり合ひに自由なお気持ちで、芝居関係の原稿をお書きになるようになった。戸板康二という編集者によつて、日本の演劇じやあなりずむは、初めて先生を発見したのである。勿論折角戸板が編集者になった事だから、と言ふ、先生のお気持ちが動いてゐた事は無視出来ないとしても、やはり、此手柄だけは書きとめておくべき責任を感じる。

池田弥三郎「かぶき讃追い書き」

#### ●『折口信夫全集（ノート編）』第5巻 目次(中央公論社／1971)

日本芸能史／はじめに／1 海の神の芸能／2 山の神の芸能／3 もどき／4 神楽と神遊びと／5 神楽の時／6 神楽の採物／7 花と扇と／8 東遊び／9 なおび（直日、直毘）／10 田遊び／11 天つ罪／12 鬼／13 念仏踊り／14 出雲の田遊び／15 田舞いに関する結論／16 田楽の概論／17 脇能の発生／18 作りもの／19 田楽の種類／20 田楽能と座と／21 座と舞台と／22 村田楽と風流と／23 田楽、猿楽の盛衰／24 田楽、猿楽の種目／25 田楽の能とその先輩芸／26 曲舞い／27 幸若舞いの発生／28 幸若舞いの詞章／29 幸若舞いの特質と諸流／30 幸若舞いの先行芸／31 念仏踊りと出雲のお国／32 念仏踊りから歌舞伎へ／33 「かぶき」という語（1）／34 「かぶき」という語（2）／35 「かぶき」という語（3）／36 風流踊りと祇園囃しと／37 沖縄の念仏踊り、名古屋山三郎／38 出雲お国、歌舞伎の座組み／39 櫓と花道と／40 花道と山台と／41 相撲の舞台および幕／42 たぶさき／43 芝居、花道および役人の種類／44 野見宿禰、人形芝居の舞台／45 鳥の遊び／46 棧敷／47 見所と見物と／48 歌舞伎芝居のほめ詞と悪態と／49 狂言と歌舞伎芝居と／50 神事舞踊／51 春日若宮御祭り／52 人形の話

#### ●評論家としての評価

折口信夫は、戦中から戦後にかけて、五つの俳優論と、四つの追悼文、そして九つの劇評、二つの論文、いくつかのエッセイを残した。（中略）にもかかわらず文壇は、詩人の道楽と思い、劇壇は文学者の好き勝手な放言として相手にせず、今日まで、この評論劇評の意味を問うた人は、愛弟子戸板康二、池田弥三郎を別にすれば、文壇では川村二郎と高橋英夫、劇壇では意外にも鈴木忠志の三人しか私は知らない。これらの業績はもっと正確に評価されるべきなのである」

渡邊 保「折口信夫の陰謀」

## 2. 絵葉書というメディア

### i 絵葉書概略史

明治4(1871)年 郵便制度開始

明治6(1873)年11月19日 郵便葉書并封袋発行規則公布(葉書認可)

同 年12月1日 郵便葉書発行

明治10(1877)年 万国郵便連合加盟

(日本加盟時:アメリカ合衆国、イギリス、イタリア、インド、エジプト、オランダ、ギリシア、スイス、スウェーデン、スペイン、スリランカ、セルビア、ドイツ、トルコ、デンマーク、ノルウェー、ハンガリー、ベルギー、フランス、ポルトガル、香港、ルーマニア、ルクセンブルグ、ロシア、海峡植民地(マレー半島におけるイギリス植民地)、フランス植民地等)

明治33(1900)年3月 私製葉書認可

・国内料金…1銭5厘、国外は4銭/寸法(mm)…縦90×横140以内

・図案…国外—コロタイプ刷りの風俗絵/国内—河鍋狂斎の漫画や安藤広重の風景画など

明治35(1902)年 万国郵便連合加盟 万国郵便連合加盟25周年記念絵葉書集発売

明治37(1904)年 日露戦争開始 【絵葉書ブーム開始】

9月5日 明治37年戦役(日露戦役)記念 第1回発行

12月25日 明治37年戦役(日露戦役)記念 第2回発行

博文館より雑誌『ハガキ文学』創刊

明治38(1905)年 2月11日 明治37-38年戦役(日露戦役)記念 第3回発行 「旅順口の部」・「遼陽の部」・「海軍の部」・「天長節の部」・「赤十字事業の部」 (134,000組発行)

10月15日 明治37-38年戦役(日露戦役)記念 第4回発行 「旅順口の部」・「沙河の部」・「奉天の部」・「交通の部」・「海軍の部」 (140,000組発行)

10月22日 海軍凱旋大観艦式記念 (190,000組発行)

### ●絵葉書ブームの要因

●万国郵便連合加盟二十五周年絵葉書発売(明治35年)

●日露戦争戦役紀年絵はがき(明治37・38年)

・戦地からの郵便物は無料であったため、内国と戦地でさかんにやり取りが行われた。

・逓信省により、日露戦争の戦勝記念絵葉書が販売される。

### 【私製絵葉書の始め】

明治三十三年十月一日より、私製絵葉書発行許可の逓信省令あり。同五日発行の『今世少年』第一巻九号に、石井研堂案、小島沖舟筆、二少年シヤボン玉を吹く図の彩色石版摺絵葉書を附録として読者に頒つ。これ私製絵葉書の始めなり。

『明治事物起源』

### ii 歌舞伎絵葉書発行について

明治二十年頃には写真銅版の技術も完成したので、俳優の写真は雑誌の口絵や新聞へ掲載されるやうになり、これが浮世絵へ甚大な影響を与へたのである。新川の鹿島清兵衛が写真術に凝り、道楽半分に仕事として始めた写真館で盛んに俳優の舞台姿を撮影したが、明治廿九年に団十郎が歌舞伎座で「暫」を演じた時には、千秋楽の日に看客席へ機械を据ゑ、俳優の居並んだ舞台面を其まま撮影した。これが舞台撮影の嚆矢である。(中略)

俳優の写真をコロタイプに製版し「絵葉書」として売り出すやうになつたのは、明治三十七年頃からだ。これが絵草紙屋の錦絵に致命的な打撃を与へ、遂にそれを亡ぼすまでに発展したのである。震災後はコロタイプが直接端書版の紙へ焼きつけたものと変り、今に及んでゐる。

渥美清太郎「錦絵から写真へ」

そのうちに、開演中に、二階の正面から撮影した場面のブロマイドが、作成されるようになった。正確にはいえないが、昭和二年十二月の歌舞伎座の「五人男」の稲瀬川のあるから、そのころから、売り出したのであろう。

戸板康二『ロビーの対話』

明治三十年代までは、写真と錦絵が共存しています。そこへ明治三十七年ごろから、日露戦争によってはじまる絵はがきブームが台頭して、錦絵に代わって絵はがきが浸透してゆくことと思われます。

児玉竜一「歌舞伎と写真・絵はがき・ブロマイド」

### iii 絵葉書研究

#### 絵葉書研究

- ・小森孝之 1978『絵葉書 明治・大正・昭和』
- ・佐藤健二 1994『風景の生産 風景の解放 メディアのアルケオロジー』
- ・柏木 博 2000『肖像のなかの権力 近代日本のグラフィズムを読む』
- ・山岸郁子編 2011『帝劇と三越』
- ・田邊 幹 2002「メディアとしての絵葉書」
- ・平田健 2008「日本考古学絵葉書百景 明治時代篇」

#### 歌舞伎絵葉書・ブロマイドに関する研究

- ・児玉 竜一 2002「歌舞伎と写真・絵はがき・ブロマイド」
- ・埋忠 美沙 2007「東京文化財研究所無形文化遺産部所蔵 歌舞伎絵はがき・ブロマイド目録——明治・大正——」
- ・埋忠 美沙 2008「東京文化財研究所無形文化遺産部所蔵 歌舞伎絵はがき・ブロマイド目録——昭和——」
- ・高塚 明恵 2005「折口信夫資料の整理」
- ・齋藤しおり 2009「折口信夫の歌舞伎絵葉書コレクションについての一考察」

## 3. 歌舞伎絵葉書コレクション概要

### ●データベースについて

【担当者】統 括：小川直之（國學院大學教授・國學院大學日本文化研究所教授）

作業者：厚香苗（14年度）・沼崎麻矢（14・15年度）・高塚明恵（15～17年度）・発表者（17・18年度）

\*平成14～17年度のデータベース化においては、高羽将人氏の助言・教授を受け、平成16～18年度には、データベース化に際して國學院大學名誉教授・徳江元正博士の指導・教授を受けた。

#### i データベース項目

- ・資料番号…os-e○○○○（番号・4桁）
- ・種類…絵葉書なのかブロマイドなのかの区別
- ・題目…絵葉書の画像に題目として印刷された文面（演目・場面名・役者名などが記載）
- ・演目・場面名…画像として撮られた場面、演目の名称。絵葉書には正式名あるいは略称が用いられているため、データベースではその両者を並記。
- ・役名…その場面の役名
- ・役者名…その場面を演じている役者名
- ・最終名跡…その役者の最終的な名跡

- ・劇場名…上演劇場名で、絵葉書に居刷されていることが多いが、不明なものもある
- ・人数…絵葉書などに映っている役者数
- ・カラーorモノクロ…絵葉書・ブロマイドの画像の区別であるが、ここでいう「カラー」はカラー写真ではなく、写真に着色してカラー印刷されたもの
- ・日付…絵葉書の上演年次などの印刷から推察。また、演目・場面からも上演年次などを同定した。
- ・自筆書き込み…折口による書き込み
- ・裏（宛名面）にある発行元…絵葉書の発行所
- ・裏（宛名面）印字色…宛名面の印刷色、
- ・裏（宛名面）言語…「郵便はがき」を翻訳した言語
- ・裏（宛名面）切手絵…切手を貼る場所に刷られた絵柄
- ・裏（宛名面）自筆書き込み有無…折口による書き込み

「歌舞伎絵葉書・ブロマイドのデータベース化」  
 (『折口信夫博士の歌舞伎絵葉書コレクション』)

## ii 蒐集時期

明治 38 年（絵葉書写真面の上演時期から推測）～昭和 25 年  
 ＊役者絵葉書販売開始…明治 37 年

## iii 枚数

総数 2547 点（内訳：絵葉書 2372 点・ブロマイド 173 点・不明 2 点）

## iv サイズ (mm)

絵葉書「140×90」／ブロマイド「156×113～165×118」（大判）、「70×43」（小判）

## v 内容

### ①「来簡…片岡仁左衛門の襲名披露の葉書。

通信欄

おかへりなさい

口上 私からもよろしく御願ひいたします 仁

宛先欄

昭和十一年初春興行 十二代目片岡仁左衛門襲名披露狂言 三千両初春蔵入 本郷町歌舞伎通り歌舞  
 伎座 (判子)

### ② 宣伝用…銀座上方屋写真館

皆様の寫眞場は／何と言つても……上方屋です／きつと御氣に召します／皆様の誇り／  
 若さやら……美しさやらが／上方屋寫眞場／銀座尾張町（交差點際）／電話京探四九七番

### ③ 懸賞用…矢吹高尚堂宛「帝国劇場内三階繪ハガキ賣店」

写真面

森律子 村田竹子 村田喜久子 明石久子 初瀬浪子 江原君子  
 河村菊枝 菊田壽美子 藤間房子 櫻木花枝 小林延子 堀富貴子  
 東日出子 小林京子 村田美彌子 若林菊子 音羽兼子 桂木瑞枝  
 橘薫

宛名面

懸賞

帝劇十二月女優激入場券呈上

- 一帝國劇場女優諸嬢の姓名を完全■■■■方へ十二月女優劇入場券白券三十枚、三階券七十枚を一名一枚宛呈上致します
- 一答案はこの端書きの肖像番號を姓名の上は記入し御住所芳名を明記して投函してください  
但し一錢五厘切手貼付のものに限る
- 一答案受付は十二月十八日限りと致します
- 一帝國劇場關係者並に同住所より一通以上の答案は除外致します
- 一完全なる答案者百名以上の時は抽籤を以て入場券を進呈者百人に限りま  
す
- 一抽籤は十二月十九日帝劇文藝部御立會の上決定直ちに當狂言端書きを以て當籤者各位に其旨御通知致  
します

## vi 発行所

|            |       |      |                             |
|------------|-------|------|-----------------------------|
| ・銀座上方屋     | ..... | 1579 | (1638) 点 (東京銀座上方屋・銀座上方屋平井舎) |
| ・TONBOYA   | ..... | 125  | 点                           |
| ・東京本郷矢吹高尚堂 | ..... | 91   | 点                           |
| ・新富町森山     | ..... | 39   | 点                           |

＊大正 12 年前後の劇場における絵葉書店（「劇場機関物篇」『現代俳優名鑑』）

- ・市村座…絵葉書・袋物「島田」、絵葉書・ハンカチ「久川」
- ・帝國劇場…絵葉書類「上方屋」（1 階）、絵葉書「矢吹高尚堂」（3 階）
- ・有楽座…絵葉書「高尚堂」（1 階）、絵葉書「上方屋」（2 階）
- ・明治座…煙草・絵葉書「東京堂」、絵葉書「上方屋」
- ・新富座…絵葉書「松竹直営売店」（店名なし）

### 【上方の発行所】

役者写真といへば、道頓堀の石川屋——後の石川呉服店。元、石川屋というたかどうかも、はつきりしない——で、わびしい台紙に、人気役者のしゃしんをはつて売つてみたほかはない頃である。

「憂々たり 車上の優人」

角の芝居と朝日座との間に後、石川呉服店となつた同じ家で、役者の写真を売つて居た。蔭戸をあげ、障子囲ひにした店床を卸した落ちついた家で、手札型の台紙にはつた舞台姿や、豆写真を張りつけた糸巻などが、その商品であつた。

「春永話」

## vii 印刷言語

- ・仏語…2111 点／・英語…1504 点／・独語…230 点／・伊語 122 点／・露語…121 点
- ・複数言語…「TONBOYA」／日本語・仏語・独語・露語・伊語など／98 点余／明治末期～大正中期  
「新富町森山」／日本語・仏語・独語・露語・伊語など／8 点
- ・日・仏…「銀座上方屋本店」、「新富町森山」

### ＊言語併記の例

「英／仏」…1049 点／明治 30 年代後半から大正中期、大正 3～8 年

「日・英・独」…108 点／明治～昭和

### ●宛名面言語

- ・日本語「きかゝは便郵／きかゝは便郵（左）／郵便はかき／郵便はがき」
- ・仏語「CARTE POSTALE」
- ・英語「POST CARD」
- ・独語「Postkarte」／伊語「Cartolina Postale」／露語「ОТКРЫТОЕ ПИСЬМО」  
／西語「Tarjeta postal」／蘭語「Briefkaart」



- \* 「Union Postale Universelle」(万国郵便連合) …海外に投函するためには必ず明記しなければならぬ。
- 海外土産として生産されていた。

## viii 切手絵(宛名面デザイン)

- ・「内国、支那、朝鮮及新占領地相互間壹錢五厘…」
- ・「大入」
- ・バラ
- ・巣箱
- ・星
- ・渦巻
- \*TONBOYA は「ハガキ」の文字が「トンボ」のマーク

## ix 蒐集役者

|                  |       |          |
|------------------|-------|----------|
| ・15代目市村羽左衛門      | …………… | 170 点    |
| ・6代目尾上梅幸         | …………… | 157 点    |
| ・5代目中村歌右衛門(中村芝翫) | …………… | 151(16)点 |
| ・4代目澤村源之助        | …………… | 144 点    |
| ・7代目澤村宗十郎(澤村訥升)  | …………… | 107(9)点  |
| ・7代目松本幸四郎(市川高麗蔵) | …………… | 106(20)点 |

## ●戸板の回想

○ここで、先生は、役者の顔についてまた話された。

\*歌舞伎のいい顔は雀右衛門(先代)のような顔だ。仁左衛門(十二代目)は、美しいというだけの人で、それが芸を助けていない。

○「演劇界」の表紙を見て、

\*明治の役者の写真を見ると、写楽のような味が出ている。あの時分の写真は、正直なのかね。——こんな顔で十次郎や初菊(「太功記十段目」の役)も妙だが、むかしは舞台にさえ出ていれば、美しいと思って、人は見ていたのだろう。

(中略)

\*写真を出してみると、魁車はよほど璃瑠の影響を受けている。「本蔵下屋敷」の若狭助のような役は、顔まで璃瑠に似ていておかしい。

「折口信夫坐談」

## ●池田の回想

——猿之助という人は意志が強そうな顔で、その点、菊五郎の顔とは違う。吉右衛門にしても適当な顔はしていない。そう言えばみんな不適当な顔ばかりだね。しかし猿之助は愛敬がない。若い人の愛敬のないのとまた違う。反感をそそるもののある顔だ。

「私製・折口信夫年譜」

## x 書き込み

- ・書き込み点数(写真面) … 160 点
- ・書き込み点数(宛名面) … 87 点 (宛名面が無地のブロマイドに多い)
- ・書き込み内容…台詞・役者名・役名・演目名・覚書・訂正など

## xi 上演劇場について

- ・歌舞伎座 (596)
- ・帝国劇場 (352)

- ・市村座 (228)
- ・新富座 (257)
- ・本郷座 (197)
- ・御国座 (14)

ほかにも、京都南座、中座、弁天座、蓬莱座など

## xii 演目について

- ・時代物…500 点以上（「仮名手本忠臣蔵」・「絵本太閤記」、「一谷嫩軍記」、「伽羅先代萩」など）。
- ・世話物…400 点以上（「心中天網島」、「伊勢音頭恋寝刃」など）
- ・歌舞伎十八番…100 点以上（「矢の根」、「勸進帳」など）
- ・新劇…50 点余（「オセロー」、「人形の家」など）

### \*岸姫について

「岸姫」のことが、これで三度出てきている。先生のよほど好きな芝居だったことがわかる。「伊勢物語」が二度、ともに見たくても、やってくれないものであった。

「折口信夫坐談」

### \*コレクション蒐集の様子

芝居の絵はがきも随分集められた。銀座尾張町を少し北へ行った東側に絵はがき屋があつて、銀座に出れば、必這入って、何枚買はれる。劇場内でも、幕間にはきつと売店に漁りにゆかれる。当月興行のものだけでなく、どんな古いものでも、好い写真、変つた役のものなどがあると、どんどん買はれた。寧ろ、古い珍しいものを見つける方に、熱を持つてゐられたやうだ。たしか、お厩橋あたりの写真屋で、源之助の古い写真を持ってゐるのを探し出し、五、六枚買って来て、おほ自慢をしてゐられた」

（鈴木金太郎「先生の戯曲のことなど」）